文化・文学比較論レポート

『紫禁城の黄昏』を読む

99K077　田 中 正 範

21世紀初年度9月の北京、紺碧の空に無数の黄色い龍がたなびいていた。私は2008年度オリンピック招致成功にわき立つ北京を訪れ、紫禁城を見学することができた。広大な天安門前広場を過ぎ、天安門の「巨大なウサギ穴」（ジョンストン、493（訳者あとがき））をくぐり、龍宮城のごとき大和門をくぐり抜ける間にその異様ともいえる巨大さ、彩色に感動を覚える反面、異次元の空間に入り込んだような幻想を感じたのである。紫禁城は「不思議の国」であった。

1919年3月3日、レジナルド・フレミング・ジョンストン（Reginald Fleming Johnston）は紫禁城の北の門、壮大な神武門の「ウサギ穴」を通って「不思議の国」紫禁城へ登城した。「20世紀の新しい中国から、ローマ建国よりさらに古い時代から続いている中国へと足をふみいれたのである」（ジョンストン、84）。そこには想像を絶する空間と時間の世界があったという。

紫禁城の北半分には、かの西太后の懿旨により、3歳にならずして、自己の意思に関係なく皇帝になり、辛亥革命により6歳で退位させられるが、「清室優待条件」により小朝廷を維持することを許され、13歳に成長した宣統帝溥儀が幻の「天子」になるべく教えを受けるため英国人教師ジョンストンを待っていた。

『紫禁城の黄昏』（入江曜子・春名徹訳　岩波文庫, 1998。原タイトル　*Twilight in the Forbidden City*, 1934）はジョンストンが1919年から1924年の間、紫禁城の主、清朝の廃帝溥儀の家庭教師として体験した異文化体験の記録である。ジョンストンは紫禁城に立ち入った最初の外国人であったという。彼は何を見聞きし、何を考え、何を夢見たのであろうか。

19世紀になると、大清帝国は歴代王朝の末期に見られるがごとく腐敗した体制を立て直すことができず、列強の侵略を受け、植民地化の危機にさらされていた。それは異民族である満州族の王朝に対する不満だけではなく、民主化運動への導火線になりつつあったのである。

1898年、徳宗光緒帝は清朝の体制改革と立憲君主制の確立を主張する康有為の提言をいれて戊戌変法を断行したが、現状変革を恐れる保守派は、北京郊外の離宮に引退していた西太后をかつぎクーデタを行った。光緒帝は幽閉され、康有為は亡命し、改革は挫折した。この時、西太后を助けたのが栄禄であり、改革派を裏切ったのが袁世凱であった。そして栄禄の娘は溥儀の母となった。

西太后は同治帝の母、光緒帝の伯母として二代にわたる皇帝を操り、また再び表舞台に登場した。排外主義を唱える義和団の運動に支持を与え、外国勢力の駆逐を策したが成功するものではなかった。清朝の体制を立て直すことは不可能であり、列強の侵略を激化させることになった。

清朝による中国の近代化が不可能であることが明らかになるにつれ、孫文らの民族主義運動が民衆の心を引きつけるようになった。1911年武昌の反乱は中国南部全域に拡がり、1912年1月1日中華民国が成立し、孫文が大総統に就任し、清朝は崩壊した。辛亥革命の成立となったのである。

しかし、孫文らの共和政権は弱体であり、北京を中心とする北方の保守勢力・軍閥との妥協を余儀なくされ、孫文は大総統の職を袁世凱に渡した。袁世凱は、自ら皇帝になることを夢見て1916年に帝政を宣言したが、民衆の支持を得ることができず、失意の内に病死した。

孫文らの共和派は広東に政府を樹立し、北京の名目上の中華民国政府との対立が始まった。各地の地方高官や軍人は自立をはかり、それに列強が結びつき、軍閥の恣意的な抗争時代が始まったのである。

そのころ、北京の紫禁城には、六歳で退位させられた宣統帝溥儀が、「清室優待条件」という共和国との取り決めにより、小朝廷を維持し、大清帝国の名残をとどめた宮廷生活を送っていたのである。政治的混乱の中で復辟を目指す動きも後を絶たなかった時代でもあった。

ジョンストンはどのような思想・立場で中国と接していたのであろうか。彼は中国各省をすべて踏破し、歴史に通暁し、風土・人情を熟知し、儒教を研究し、中国の古詩にも造詣が深かったという（溥儀、217)。彼にとってキリスト教と結びついた西欧文化の導入は中国に腐敗と堕落をもたらすものでしかないとの考えにまでなっていたという（ジョンストン、486（訳者あとがき))。彼は香港の英国領事館に勤務していたころ、光緒帝を擁した「変法運動」に敗れ、西太后に弾圧され、香港に亡命中の康有為と親交を深めていた。また彼を溥儀の家庭教師に推薦したのが李鴻章の子息李経邁であったことは、彼が儒教に深い関心を持ち、儒教的伝統文化に則った中国の近代化を理想としていたことを物語っているのではないか。「戊戌変法」挫折後の国内における権力的基盤を失った変法派の人たちに共感を持っていたと考えられる。皇帝の復辟をめざす人達にとって最もふさわしい外国人教師であったのかもしれない（ジョンストン、487－488（訳者あとがき))。

ジョンストンが紫禁城の中で経験した異文化体験はどのようなものであったのか。

紫禁城の中には、中国の伝統文化を理解し中国を愛するジョンストンにも我慢のできない伝統的な悪習があった。それは彼が西洋人であるが故に我慢ができなかったのかもしれないが。そのひとつが、崩れ行く清朝の生き血を吸い、滅亡の主な原因となり、復辟の可能性をも摘み取ってしまうと彼に思わせた「内務府」の存在であった。辛亥革命後も宦官に支配された内務府が存在し、清朝崩壊の主たる原因の一つであった「浪費と収賄の機構」はそのまま残されていたのである。

ジョンストンの分析によれば清朝滅亡の元凶は内務府であって、発展を阻害し、真綿で首をしめるように大清帝国の息の根を止めてしまったというのである（ジョンストン、104)。なぜ、宮廷事務を担当していた内務府という使用人の機関が王朝の実権を握り、滅亡に追い込む浪費と収賄の機構を作ってしまったのか。周・秦以来の歴代王朝の存亡や興廃には宦官が関係していたし、皇帝の専制独裁に寄生した宦官は最高の権勢を手に入れることもできたのである。しかし清朝では、清末に李蓮英のような宦官が出現したが、明代における宦官の横暴の教訓を生かし宦官の政治への関与を厳禁したという。ジョンストンによると、宦官制度そのものは、内務府の組織の一部であり、本来は権力もなく危険性もないものであった（ジョンストン、104)。しかし、宦官制度もその組織の一部分を形成している内務府そのものの機構が浪費と収賄、現状維持の機構であったのだという。

その具体例は清室親王たちの財産管理のやり方に認められという。親王たちは、自分の領地の広さ、所在、使用人の数も知らなかった。自身の収入については全く無知無関心であり、こ

れらはすべて管執事の手にゆだねられていたのである（ジョンストン、106）。執事の善性にすべてを任せていたということなのであろうが、このような状況が現実的に如何なる結果をもたらすかは推して知るべしであろう。

紫禁城における財産管理は、親王家におけるものと本質的に同じであった。管執事に相当するのが内務府の役人であったのである。同様に内務府のやり方が親王家のやり方であったという（ジョンストン、111）。

なぜこのような金銭感覚の欠如が生じたのか。ジョンストンは不思議な中国の教育体系の欠陥にあるという。中国の教育体系は科挙試験に見られるごとく、古典にのみ重点がおかれていたのである。算数教育が皆無であり、金銭問題は下世話のものとの感覚もあったという（ジョンストン、112－114）。このような算数に対する無知が、内務府高官の帳簿監査欠如、財産管理・運営への無能となったのであろう。また内務府は皇室の財産管理を委託された官庁であるにとどまらず、皇室と国家の各省庁とを仲介する機構であった。内務府の腐敗体質は、政治の世界にまでおよび、中国の官吏社会の悪名高い中間搾取と汚職という一時代を演じたのである。

ジョンストンにとって内務府の改革なくして近代的皇帝としての溥儀の復辟は考えられなかった。溥儀と共に宦官追放、内務府の改革に着手したのであった。

清室における結婚問題、それも彼の神聖なる教え子溥儀の結婚は、西洋人ジョンストンにとって、興味のある異文化体験であったであろう。溥儀が改革に手を染めた内務府は相変わらず「現状維持」を唯一の拠り所とし抵抗していた。また溥儀自身なんの統治権も持たない皇帝という立場を自覚し始め、苛立つことが多くなっていた。その不満を静めるために皇族たちが考えたのが皇后を提供することであった。清室における妃選びはどのような方法であったのか。溥儀の自伝『わが半生』によると同治・光諸帝時代の方法は候補の娘たちを一列に並ばせ、未来の新郎が直接見て選び、選ばれたものにはその場でしるしをつけたのだという（溥儀、228）。溥儀の場合は写真で選ぶ方法に改めたという。写真に鉛筆でしるしをつけたのである。このこと自体現在日本の慣習でもある見合い写真と同じであるのだが、中国皇室の婚礼の奇妙な点は、その中から複数の妃を選び、詔勅の発布によって皇族の身分になるのだという（ジョンストン、185）。皇帝と結婚したという事実によって自動的に位置付けられるのではなかった。

溥儀は複数の妃選びに抵抗したという（ジョンストン、187）。ジョンストンは溥儀が西欧流の考えを身につけ始めた徴候と受け取っていたかもしれないが、溥儀の自伝によると、彼の本当の気持ちは一人の妃も必要でないのに、なぜ同時に二人の妃が必要なのだというものであったという（溥儀、235）。また妃選びには皇族達、特に大妃達の身勝手な勢力争いが関係していたことはいうまでもない（溥儀、227－230）。

その結果選ばれた皇后が満州貴族の名門栄源の娘婉容であり、次妃文繍であった。溥儀と皇后たちの生活はどのようなものであったのか。溥儀は盛大な婚礼の儀式の最中にもくりかえし、ひとつの問題を考えていたという。「私は皇后と妃を一人ずつ持って、一家を成した。これまでとの違いはどこにあるのだろう」（溥儀、235）、「私は大人になったのだ。もし革命がなかったら、私の『親政』の時が始まったはずなのだ」（溥儀、235）。溥儀はこのように考えた以外、夫婦のこと、家庭のことについて、ほとんど考えることができなかった。溥儀の「復辟」へのアイデンティティはその後も彼の心の中で大きな部分を占め続け、それが皇后たちの悲劇の原因ともなったという（溥儀、437）。はたして、それだけであったのだろうか。溥儀は3歳にならずして皇帝になり、幼年期から思春期にいたるまで、伝統的な朝廷の生活・習慣を強いられ、時

代の流れに翻弄されてきたのである。女性に対する心の形成がなされていなかったのではないだろうか。

皇后たちは幻想さえも見ることができなかったのかもしれない。それはどのような人生であったのだろうか。婉容はのちにアヘンに溺れ、廃人となり狂死したという。文繡は婉容との確執や次妃という立場に耐えられず、溥儀のもとから去ることになるのである。

ジョンストンは溥儀の結婚について、異文化体験としての、輝かしい婚儀の様子を紹介し、その冬の三日間、「黄昏の紫禁城」に真昼の光がさしこんだようであったと書いている（ジョンストン、240）。ジョンストンは西洋人として、溥儀の教師として皇后たちの悲劇を予見できなかったのだろうか。

ジョンストンは溥儀を皇帝として敬い、中国人教師や役人以上に宦官追放や皇室財産の管理改革に取り組んだのである。彼をそのように成さしめたのは何であったのであろうか。当時の西洋人の中国皇帝にたいする一般的理解はどのようなものであったのか。辛亥革命直前に北京を訪れたオランダの学者、アンリ・ボレールは当時の印象を次のように書き記しているという。「およそ傲慢で近づきがたい紫禁城の城壁の後ろには、誰に知られることもなく孤独の中に取残された皇帝がいる。彼はこれまでいかなる人物にも心服しなかったし、これからもしないだろう」（ジョンストン、58）、また「桃色と金色の城壁の彼方、深い紺碧の空のもときらきら輝く屋根を持つおとぎのような宮殿」に住む「神話のような幼帝・宣統」、「いわば北京は、ひとつの巨大な寺院である。その奥深い祭壇すなわち紫禁城におわす神、それが皇帝である」（ジョンストン、58）。啓蒙主義、科学主義を経験した西洋人にとっても、紫禁城の中の皇帝は神秘中の神秘であったのである。

この幼帝は13歳に成長した1919年3月3日の寒い朝に神話の玉座から降りて英国人教師と握手を交わし、みずから神の序列を離れ、単なる「ボーイ・エンペラー」になったのだとジョンストンは書いている（ジョンストン、58）。しかし、紫禁城は不思議の国であったのであろう。人間溥儀に仕えたはずのジョンストンであったが、「神話のような皇帝こそが真実の皇帝であり、神話であることを拒絶する皇帝などというもののほうこそ、架空の存在なのかもしれない」（ジョンストン、58）という神話の世界にいつのまにか引き戻されてしまったのである。

『紫禁城の黄昏』においてジョンストンが描いた物語は、事実であったのであろうか、幻想であったのだろうか。事実と幻想は表裏一体である。ジョンストンにとって紫禁城は、アリスが「ウサギ穴」をくぐり抜けて入り込んだ「不思議の国」であったはずであるのだが、溥儀の信頼を得るうちに、紫禁城の魅力にとりつかれ、「不思議の国」でなくなったのであろう。英国人教師ジョンストンは清朝の遺臣より遺臣らしく、廃帝溥儀のため宮廷改革に取り組み始めたのである。文一品の官位、特典と部屋数三十をこえる「養生斉」をたまわり、外国人としてはじめて城内に居住することを許されたのである。このこと自体中国の現実政治に何の影響もおよぼすことのできない官位をもらったのであり、紫禁城におけるユニオンジャック（ジョンストン、496（訳者あとがき））という用心棒だったのかもしれない。しかし、ジョンストンにとって溥儀は皇帝であり、かれの立場は異文化体験を超えたものになってしまったのであろう。

『紫禁城の黄昏』はジョンストンの異文化体験の記録であるとともに、皇帝溥儀の記録でもある。溥儀はジョンストンと会話することにより、異文化を知ろうとした。溥儀は「復辟」への幻想を持っていなかったとジョンストンは執拗に書いているが、溥儀の異文化への興味は近代的な皇帝となるためのアイデンティティを忘れるためのものではなかったであろう。皇帝に

なるためという溥儀のアイデンティティは1945年満州国崩壊まで続いていたと考えたい。大清帝国を築いた偉大な祖先のため、また国民の父として招魂祭祀を行い、生命の永遠性を得るためには当然のアイデンティティであったのかもしれない。これこそ儒教の真髄なのであるから。一方、ジョンストンは中国の伝統を愛するが故に中国国民の善性を信じ、溥儀復辟の可能性を夢みた。廃帝溥儀を復辟の際英明な立憲君主として、内務府を管理できる君主に育てるということであったのであろう。溥儀復辟への幻想は、かの巨大な保守的組織・内務府の改革という、エネルギーまで生み出したのである。

しかし、時代は確実に流動化していた。『紫禁城の黄昏』からは、「辛亥革命」後の北京政府の堕落と豹変ぶり、軍閥間の自分勝手な内部抗争しか読み取れないが、1920年代の中国は学生や、知識人の間には民族運動がめばえはじめ、次第に民衆をひきつけはじめた時代でもあったのである。中国には、人民の世論にそむいた王朝が人民の反抗によって交代させられるのはやむをえないという伝統、すなわち易姓革命の思想も古代から存続してきたのである。

ジョンストンと溥儀の努力もむなしく、1924年11月5日、最後の皇帝は馮玉祥により紫禁城を追われ、天津の日本租界に移ることになる。日本租界に滞在中に起きた東陵冒涜事件が、溥儀の復辟への執念を高めることになったという（溥儀、392）。乾隆帝と西太后の陵墓が冒涜されたのである。中国人、満州人にとって祖先の墓を守り、祭祀を行うのは生命の永遠性を保つことにつながり、祖先の墓を暴かれるということは命を絶たれることと同じなのである。「この恨みに報いなかったならば、私は愛新覚羅の子孫ではない」（溥儀、392）、「私のいる限り、大清は滅亡せぬ」（溥儀、392）と溥儀は空に向かって復辟を誓ったという。東陵事件が溥儀を満州に向かわせた大きな要因であったのだろうか。その後溥儀は満州国執政、皇帝となり、そして日本敗戦によるシベリア抑留、ハルビンと撫順での戦犯生活を経験した。溥儀は戦犯管理所で人間改造は受けたが、1951年に日本人戦犯と共に釈放され一市民としての生活ができたのである。中国は儒教の国である、論語の以徳報怨を実施したのである。ロシア革命により惨殺されたロシア最後の皇帝ニコライ二世一家の悲劇に比べれば対照的である。中国最後の皇帝は1961年10月17日61歳で永眠、数奇な人生に幕を降ろしたのである。

ジョンストンは晩年彼の隠居所となったスコットランドの島に「満州国」の旗を掲げるのを常としていたという（ジョンストン、499（訳者あとがき））。彼の教え子の中華帝国皇帝への復辟はならなかったが、傀儡国家ではあるが「父祖の地」・「心から愛した出生の地」の皇帝になったのである。少なくとも彼と溥儀が共に抱いたかもしれない幻想はある期間現実となったのである。

ジョンストンの紫禁城における異文化体験は国家・国民という基盤を持たない皇帝とともに夢見た幻想であったのかもしれない。異文化体験とは、ある部分、幻想を伴うものではなかろうか。ジョンストンでなくとも同じ運命をたどることになったと考えたい。幻想のない人生とはどのようなものであろうか。

ジョンストンと溥儀の幻想の記録『紫禁城の黄昏』は理想的な満州国皇帝としての溥儀像を演出し、また極東軍事裁判の検事側の資料として、さらに溥儀の釈放後の自伝『我的前半生』としてよみがえった。紫禁城という幻想を生み出す玉手箱は現在、将来とも存在し続けるのである。

21世紀の中国において『四書五経』の教育が復活しているという。『紫禁城の黄昏』が21世紀にまたよみがえることがあるのだろうか。ひとついえることは、現在の中国においても儒教的システムが生活の根拠であるということである。

参考文献

R. F. ジョンストン、1989『紫禁城の黄昏』入江曜子・春名徹訳、岩波文庫。
愛新覚羅・溥儀、1992『わが半生（上）』ちくま文庫。
『ブリタニカ国際大百科事典』

（レポート指導教員　北垣宗治）